

切断近似による偏光放射伝達の効率的計算法の開発

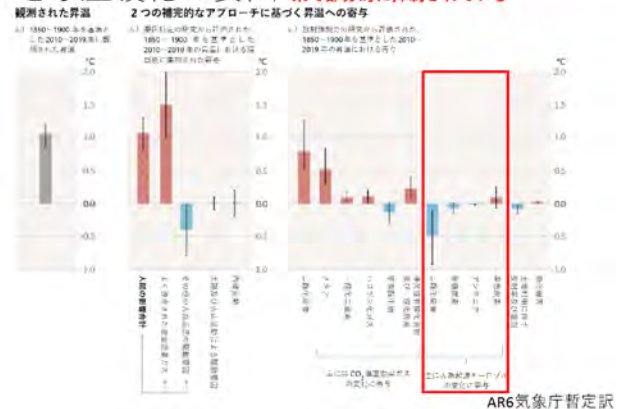
桃井裕広 (千葉大学大学院)

入江仁士・中島映彦・関口美保

開発論文:

Momoi et al., 2022, <https://doi.org/10.1016/j.igsrt.2021.107976>

地球温暖化の要因



AR6気象庁暫定訳

放射観測からの物理量の推定

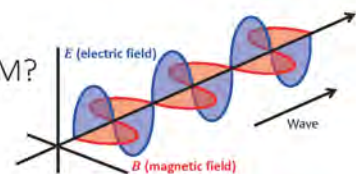
エアロゾル (や水蒸気など) の大気リモートセンシング
 ... 地上・衛星から輝度観測して物理量を得る



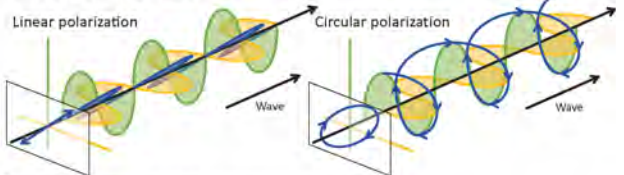
放射伝達モデルの精度が物理量の推定に影響を与える
 ⇒ 近年、偏光を加味したベクトル放射伝達の利用が進んでいる
 しかし、ベクトル放射伝達のビックデータ処理にはスパコンが必要であり、高速に計算する理論が求められている [e.g., Sinyuk et al., 20]
 ⇒ サブテーマ1

Scalar & vector RTM?

放射 (電磁波)
 - 電場と磁場で構成される
 - 電場と磁場は垂直である



放射 (電場) の重ね合わせ

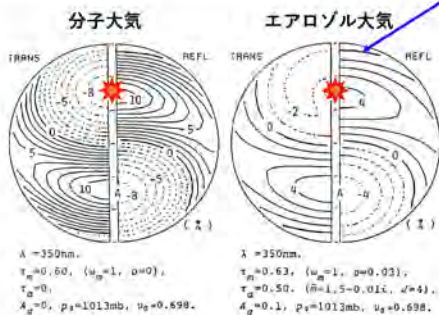


放射輝度は“偏光”成分がある
 - Scalar RTM: 放射過程を無偏光と近似する
 - Vector RTM: 放射過程に偏光が含まれる

天空輝度の偏光効果

[Ogawa et al., 1989]

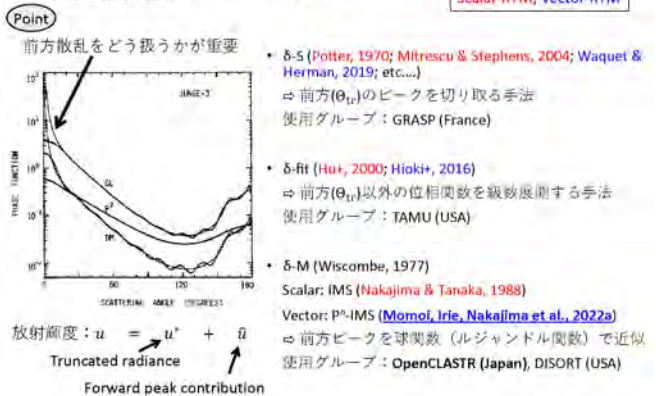
$$u_{\text{vector}} = u_{\text{scalar}} [1 + (\Delta \text{Pol})]$$



1. Rayleigh散乱が強いUVで偏光効果が大きくなる (~10%)
2. エアロゾルが多いと偏光の影響が弱まる

高速演算のアイデア

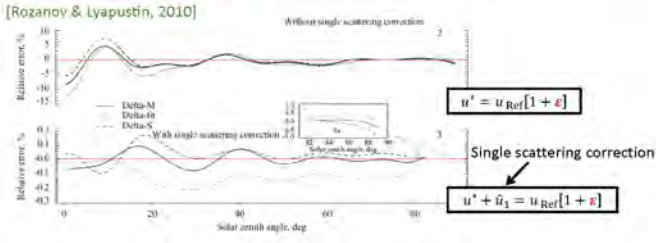
Scalar-RTM, Vector-RTM



各手法のパフォーマンス

放射輝度: $u = u^* + \hat{u}$
 Truncated radiance Forward peak contribution

δ-fit, δ-SはSystematic errorを引き起こす可能性がある
 ⇒本質的には、δ-fitとδ-Sは角運動量が保存されていないことに問題がある
 ⇒δ-Mはルジャンドル展開をすることで角運動量が保存される
δ-M法が最良の手法である [Nakajima & Tanaka, 88; Rozanov & Lyapustin, 10]



DOM + δ-Mによる放射計算の課題

○放射輝度: $u = u^*$ (DOM)
 ○位相関数: $P(\Omega, \Omega') = P^*(\Omega, \Omega') + P(\Omega, \Omega')$ (Spherical harmonics, Truncated P, Forward peak)

● u^* : DOM + δ-M
 $u^*(r, \Omega) = \sum_{m=0}^{M^*-1} u_m^*(r, \mu) \cos(m\phi)$
 ⇒ ガウス求積 ($N = M^*/2$) を使って解くことが可能 ⇒ 計算時間は N^{2-3} で上がっていく

Reference radiance: Large N + 通常の一次散乱補正 (MS; Nakajima & Tanaka, 1988)
 - エアロゾル大気: $N \sim 100$ (dust case)
 - 雲大気: $N \gg 100$
 ⇒ 計算時間は現実的ではない!!

Gibbs型の角振動が生じる ⇒ 補正が必要



Scalar Vector

(Nakajima & Tanaka, 1988) This study

IMS & Pⁿ-IMS理論

Improved Multiple & Single scattering approximation by n-th order multiple scattering correction of the forward peak

○放射輝度: $u = u^* + \hat{u}$ (DOM, Pⁿ-IMS)
 ○Phase matrix: $P(\Omega, \Omega') = P^*(\Omega, \Omega') + \hat{P}(\Omega, \Omega')$ (Truncated P, Forward peak)

● \hat{u} : IMS/Pⁿ-IMS理論の導入: perturbed RTEを逐次散乱近似による定式化

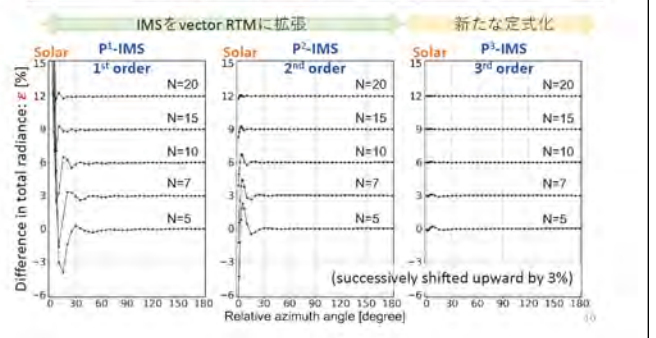
$$-\mu \frac{d\hat{u}(r, \Omega)}{dr} = -\mu \left[\frac{d\hat{u}(r, \Omega)}{dr} - \frac{d\hat{u}^*(r, \Omega)}{dr} \right]$$

定式化:
 > Scalar RTM & 2nd order: TMS/IMS : Nakajima & Tanaka [1988]
 > Vector RTM & n-th order: Pⁿ-IMS : This study, Momoi+ [2022a]

Pⁿ-IMS理論の精度 (dust case)

[Momoi et al., 2022a] M* = 2N

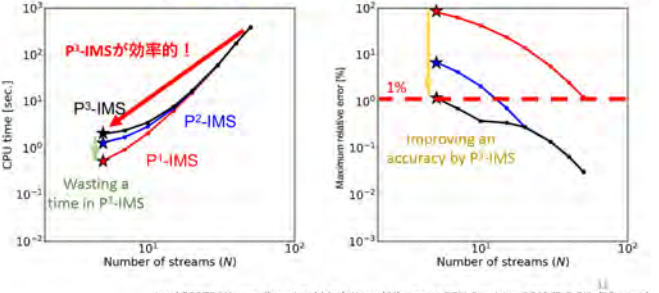
$u^* + \hat{u} = u_{Ref}[1 + \epsilon]$
 u_{Ref} was given by N = 100 with MS [Nakajima & Tanaka, 1988]



Pⁿ-IMS理論のパフォーマンス

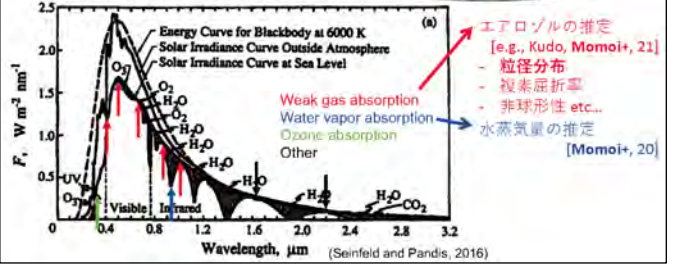
◆ Pⁿ-IMSの導入により計算時間は増加する
 P¹-IMS < P²-IMS < P³-IMS

◆ Pⁿ-IMSの導入により計算精度は改善する
 P¹-IMS > P²-IMS > P³-IMS



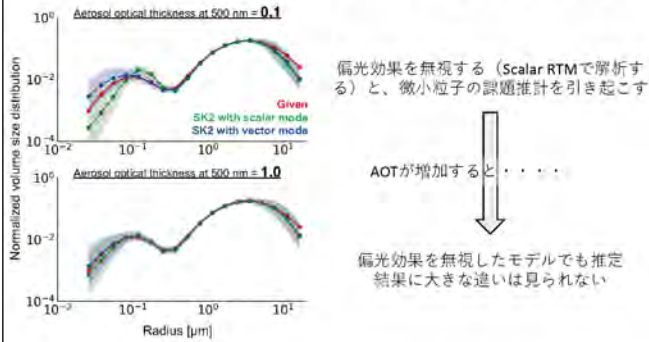
実観測 (SKYNET) への適用

天空輝度観測
 > 太陽直達光 (1分値)
 > 天空輝度分布 (10分値)



偏光効果の解析への影響（粒径分布）

Retrieved by SKYMAP ver. 2.0 [Momoi et al., 2020, 2022b]



P^n -IMS理論のまとめ

現状の課題

衛星・地上のデータ解析においてベクトル放射伝達モデルの利用が進むが、その解析にはスーパーコンピュータを必要とし、効率化が必要

解決方法

高精度演算可能なDOM法をベースに高速計算可能なSOS法をハイブリッドに組み合わせた P^n -IMS理論の開発を行った

結果

- SOS成分について3次散乱を扱うことで、エアロゾル大気下 (AOT500 < 1) で1%以内の輝度再現性を保ち、約187倍の高速化を実現した
- 数値実験から、偏光成分は1次散乱のみで十分な精度 (< 0.2%) が得られることを示した
- 本効率手法を利用した数値実験から、放射観測において、偏光効果を無視すると微小粒子の過大推計を引き起こす可能性があることが示された

将来展望

SKYNETやJAXAで利用されている放射伝達コードRpSTARに組み込まれている (現在、OpenCLASTRからの公開中)